

---

# とある奇跡の超能力者

アカルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある奇跡の超能力者

### 【Nコード】

N1279BA

### 【作者名】

アカルト

### 【あらすじ】

学園都市に住む見た目普通な青年

普通に勉強して普通に遊んで普通に友達作って……………

そんな幸せな日々は、高一の夏休みに崩れ去る

「そう、この世のあり得ない現象、人類では決して解明するは不可能な領域、そこそが

『奇跡だ』」

あらすじはある程度物語が進んだ後また更新しますm( ) ( ) m

同時に書いている小説があるので進行スピードは亀になると思いますが放置はしない様に頑張ります。

第一話 光行 健斗（前書き）

好評だった為に連載する事にしました  
まだ終わっていない作品があるのに……  
更新は基本ゆっくりです。

## 第一話 光行 健斗

「はいここ！！テストに出るから覚えておくように！！」

世界史の授業

どこぞの征服王イス ンダルの様なガタイをした教師が声を張り上げる

と、いつか髪も髭も赤く、着ている服が白いTシャツということからキャラを作っていると考えた方がいいのだが……

「ちよつ、健斗<sup>けんと</sup>」

「ん？なんだよ」

窓側の後ろから二列目の青年が隣の青年、『健斗』に声をかける、その顔はちよつと困ったような……申し訳なさそうな顔だ

「いまどこが重要っていった？教えてくれ」

「百二十ページの下から五行目だよ、ちゃんと授業聞いとけよ」

「悪い」

どうやら居眠りをしていたらしい、青年の額には枕にしたであろう筆箱の網目模様が浮かんでいる

「んじゃ、今日の授業はここまでだ！午後から『<sup>システムスキャン</sup>身体検査』があるから、忘れんじゃねーぞおめーら」

ガツハツハとアニメの様な笑いをして去っていく教師、完全に見えなくなつてから教師内はガヤガヤと騒ぎ始める……時間をみるとどうやら昼過ぎ………休み時間の様だ

「健斗健斗、早く売店行くぞ!!」

「ん、今行く」

何人かの男子友達と一緒に売店へ走る……これは、見た目普通の高校生、『みつゆき光行 健斗けんとう』の物語

「はあ………やっぱりレベル0かよ……お前は?」

「だー!!俺もレベル0に決まってるだろ!!健斗はどうなんだよ、

健斗は!？」

「俺もレベル0、みんなと一緒にだよ」

『落森<sup>らくもり</sup>高校 一年二組』

そこから男女問わず様々な話し声が聞こえてくる……中でも多く聞かれるのが『レベル0』という単語が多く飛び交う教室だ

「おまつ!!レベル1になったのか!？」

「へへ、レベル1の『電撃使い』だぜ!!まあまだ静電気程度程度だけだな……」

「なっ、こっちくんなビリビリ!!」

「おらおらっ、ビリビリビリビリ!!」

そんな様子を健斗は横目で見ながら苦笑いをする

恐らく少し前の世界では明らかなフィクション、もし本物だったとしたらテレビで連日連夜放送されても可笑しく無い様な光景  
手から電気を放射する学生など普通では考えられない……だとしたらその学生は『普通ではない人間』、『超能力者』に分類されてしまっ。

だがそんな『超能力』を『科学』で説明し更には『人工的に作ってしまおうぜ!!』という考えから作り出されたのがここ、『学園都市』だ。

東京西部三分の一を占める学園都市は人口約230万人、その内の約8割を学生が占めるまさに『学生の街』……いや、『学生の国』と表した方が正しいのかもしれない……

そして話は戻るが、その学園都市創設の目的は『能力者の研究』、だが能力者が掃いて捨てるほどいるのではなく、その人数は限られてしまっている。

なので学園都市は独自に開発した『能力者開発技術』を用いて実験台を調達しているというわけだ

だが能力というものは強力であれば強力である程独自の『演算』が求められ、その演算の為の『教育』をしなければならなかった  
そこでお偉いさん達が目を付けたのは『学生』というわけだ

補足で説明すると能力者というのは大きく六つに分けられる、それぞれ

超能力者 レベル5

大能力者 レベル4

強能力者 レベル3

異能力者 レベル2

低能力者 レベル1



無能力者            レベル0

と振り分ける事ができる

その中でも約6割の学生がレベル0で、最高のレベル5はこの中でも7人しかいないらしい……

ちなみに俺、健斗が通っている落森高校はそんな学園都市内でも下の下……これより下を探すのが難しいぐらいの位置にある高校だよって、能力者などクラスに二三人いれば多い方という第七学区にある落ちこぼれ高校だ

「おめーら早く席付きやがれ、レベル1程度でギャアギャア騒いでんじゃねえぞ!」

「おせーよ」

もう終令は二十分近く過ぎてしまい、他の教室には殆ど生徒は残っていない

それなのに何食わぬ顔で教室に入って来た担任に若干怒りを感じながら渋々健斗は席に座る

「連絡は一つだ、この頃無能力者を狙った暴行があるらしいからな、くれぐれも気おつけて帰る様に、以上!!解散」

その話は健斗もたびたび耳にした事があった……何でもレベル4やら3の奴らがストレス発散の為に無能力者をボコつてるとか……自分には関係のない話だが……

「ふう、帰るか」

いつも通りの学校生活を過ごし、健斗は帰路についた

「あつち〜な」

「学園都市の力でどうにかなんねえのか？」

「いくら何でもそれは難しいんじゃないの？」

健斗が帰ろうと席を立った後話しかけて来たのはクラスメイトの二人の男子友達だった

了見は「ゲーセン行こうぜ」

二人とも同じ第七学区に住んでおり比較的家が近い

もうすぐ夏休みだということとで学校自体が早く終わり皆暇なのだ  
そうゆう健斗もどうせ帰ってもやる事が無いので一緒に行く事にした  
ちなみにそのうちの一人が今日レベル1になった電撃使いである

「おつ、見てみるよ、あれって常盤台の制服じゃねーか？」

友達が指を指した方向を見て見ると……確かに、四人ぐらいの常盤  
台生が並んで歩いている

その周りからは何というか……お嬢様オーラというのか？物凄く近寄りづらい

「いいよな〜、お嬢様……俺の彼女になってくんね〜かな〜」

「無理無理、俺らみたいな落ちこぼれ相手にされないって」

「だよな〜」

「ん？でも健斗なら」

「まあ見た目はいいと思うんだけど……な」

「ほつとけ」

確かに、自慢ではないが自分の容姿は上の中ぐらいだ、だが……身長が155cmと……この学生生活、背の順では前から三番目までには入った事が無い……

「なあなあ」

「なんだよ」

「この道通るとかなりの近道になんだぜ」

友達が指を指していたのは暗い裏道、所々にゴミやら何やらが落ちていてきたない

「でも今日担任が言ってたじゃねーかよ、レベル0は襲われんだぞ、俺と健斗はレベル0だぞ」

「ハハン、いざとなったら俺の電撃で返り討ちにしてやるぜ!」

まあ悪くないとは思う、ゲーセンまではかなりの回り道になっていてこの猛暑の中を俺は長々と歩きたくは無い  
レベル1の電撃には毛程も頼りにしてないが

「うゝ、まあ大丈夫か」

「よっしゃ、レッツゴー!」

そう元気良く? 掛け声をあげて進んでしまった

よくニュースなどで『交通事故』やら『殺人事件』やらが伝えられるが多くの人間が『自分は大丈夫』だと勘違いしてしまっている。  
まあ今回は俺たちがそうなのだが……

「まったくよゝ、こんだけしか金持ってるのかよ? レベル0はどいつもこいつも使えねえ」

「ぎゃはは! ! なんだよその電撃? ほらほらゝゝ、ビビってるのか?」

状況は……最悪だろう

目の前には二人の能力者、恐らく一人がレベル3相当の『電撃使い』、そしてもう一人がレベル4相当の『発火能力』だろう、レベル0とされている俺たちに逃がそうとしてレベル1の友達が仕掛けたが結果は惨敗、友達は所々に火傷を負って今は気絶してしまってる。

「い、今『ジャッジメント風紀委員』を呼んだからな」

「あ？」

「お前らなんか、お前らなんか!!」

友人よ、そういう事は言わないで置いたほうが良かったかもしれないぞ、電撃使いの方明らかに切れてるし

「余計なことしやがって!!」

電撃使いの男が右腕を突き出すと目に見える程の電気が流れ、友達に直撃する

電撃の速度を避け切る事など出来ず、友達は床にうつ伏せのまま倒れてしまう、まあピクピク痙攣してるから死んではないだろうかなり痛そうだったが……

「まっ、てめえらの財布パチってさっさと逃げるか、そんな訳で消えろよ学園都市のお荷物が、てめえの金がレベル3の財布に入るんだ、光栄だろう」

そう言ってから電撃使いの方は俺に向かって電気を飛ばしてくる……このままだとやられるか？

こんな状況だ、仕方が無いかも知れない  
友達二人は……ちゃんと気絶してるよな？

「んじゃまあ、ちよつくら抵抗しますか」

「はっ？レベル0が俺等に勝てるとおもってんのかよー！」

男の手から放たれた電撃が健斗に襲いかかる、普通なら直撃だろう  
……だが……

「あたんねえよ」

その直後、確かに健斗を狙って放たれた電撃は、  
《当たる直前に枝  
分かれし、地面に吸収された》

「はっ？」

「おおすげえ、『奇跡的に』当たるはずだった攻撃が外れたぜ、怖  
かった」

「なっ、ふざけんな！！演算に狂いは無かったはずだ！！」

そんな男の叫びを異も返さずに健斗はへらへら笑う

「うんうん、演算に狂いは無かっただろっさ、確かに君の答えに間  
違いはなかった」

「チイツー!!」

両腕から数多に枝分かれした電撃が弾け飛ぶ、その全ては健斗に向かつていき

《その全ては健斗を避ける様に狙いを外れる》

「今のは危なかったぜ、だけど『奇跡的に』俺は生き延びたらしい」

「ふざけんなっ!!」

今度は痺れを切らしたのか発火能力者がレベル4という肩書きにふさわしい威力の炎を放射する、約二三メートルの炎の塊は狭い裏道の全てを覆い尽くし、逃げ場のない健斗を一瞬で包み込む

「おまつ、死んだんじゃないかねえのかあいつ」

「死んでもどうって事ねえよ、どうせレベル0、ただのカスだ」

発火能力者がその場に唾を吐き捨てる

「チツ、無駄な時間使っちゃまった、風紀委員がくる前に逃げんぞ!!」

「どっどっどっ」

後ろから聞こえた声に思わず二人は固まる

そんな、あり得る筈がない……………

あの炎を喰らって生き延びる事ができる人間など自分と同じレベル4……………もしくは学園都市で七人しかいないレベル5ぐらいだ

だが健斗が着ている制服は落森高校の物、あそこでは生徒の殆どがレベル0……………高くてもレベル2程度だ

生きているなんて事……………あり得る筈がない

二人は機械の様に後ろを振り向く……………そこには……………

塵一つ付いていない健斗の姿が

「お前、どうして?」

「ん?ああ、『奇跡的に』炎が当たらなくてさ、当たる瞬間に空洞みたいのが出来てさ、もう無いと思うけど」

「そ、そんなのあり得ない!」

そう、あり得ないのだ、今の火力は男が出せる力の全力に近い、その中に空洞?当たらなかつた?そんなの『あり得ない』

「そう、『あり得ない』からこそ奇跡だ」



「くっ、ちくしょう!!」

電撃使いがありつたけの電気を放射するが、全て健斗を外れる

「一つ教えといてやるよ」

「来るなくなるな来るなくなるな!!」

二人がありつたけの攻撃を注ぐが……当たらない

「この世のあり得ない現象、人類では解明する事が不可能な領域、それが

『奇跡』だ」

「ジャッジメント風紀委員ですの、大人しく……なっ!？」

ある学生がこの頃問題となっている『無能力者狩り』の被害を受けていると連絡を受け、現場についた彼女が目にしたのはまさに『地獄絵図』だろう

ゴミやペットボトルは真っ黒な灰と化し、大量に何かが燃えた焦げ臭い匂い、それだけで高能力者が先頭をしたのだと思われる  
そして奥には所々火傷をした青年が二人、そしてもっと奥には……

「ん？ああ、遅かったね」

気を失っている男を重ね、椅子にしてこちらを見つめる青年

「そつちがのんびりやってる間に終わっちゃったよ、まあここにいる四人、病院にはこんであげて、俺はもう帰るから」

「お待ち下さいですの」

背中を向けてさっさと帰り出しそうだった健斗を彼女は自身の能力によってその道をふさぐ

「ワオ、『テレポーター空間移動者』か、これまた珍しい能力と出会えたもんだ」

「きちんと事情聴取はさせていただきますの」

「俺は被害者なんだが？」

「それとこれとは話が別ですの」

「あー、わかったよ、だからそんなに睨むな睨むな」

健斗がそういうと目の前の少女は携帯を取り出し誰かと話し始める、恐らく病院だろう

そんな事を考えてたら倒れている四人が何時の間にか来た病院関係者各位に寄って運びこまれていく……

「では話しを聞かせてもらいますので、私につかまって下さいな」

「見たところ常盤台の制服だが、よくやるな……中学生なのに、名前は何？」

「はあわたくしは第177支部所属の

白井しろい 黒子くろこと申します」



## 第二話 幻想御手取引現場

「なあなあ、いつまで被害者の俺に尋問する気なんだ？」

「貴方の証言があり得ないのですわ、それにこの事件の被害者は以外と多くてより有力な証言がほしいのですの」

健斗が風紀委員の支部に連れてこられてからはや一時間が経とうと  
していた

最初に出された紅茶の中にあつた氷はすっかり無くなってしまつて  
いる

「それになんなのですの？ 《能力者二人が同じタイミングで演算を  
間違え、自爆した》なんて、もっとマシな証言できません？」

「実質そうなんだから仕方がないでしょ、いや、ほんと、奇跡的  
に怪我無く済んで良かったよ」

確かに、健斗の証言通り電撃使いは全身に火傷を負い、発火能力者  
の方は電撃によって感電していた……

そうなると二人が倒れたのは仲間割れか……それとも能力の暴走か  
になつてしまふ。

だが前者はあり得ない、風紀委員が来ている事を知っているのに仲  
間割れなど、片方が捕まればもう片方の素性など簡単に割れてしま  
ふ。

「それにしても常盤台中学か、自分自身も移動してたから空間移動  
系のレベル4つていったところか、羨ましいよ」

「ありがとございますですの、あつ、ここにサインを入れれば今日は終了ですの」

ふう、と一つため息をついてから自分の名前を記入する、はやく帰ってゲームしてえ

「ん、あと余計なお世話かも知れないけど少し休んだ方がいいと思  
うよ、なんだかげっそりしてる」

「お気遣い感謝いたしますの、ですが急を要する事件があつて」

今度は白井さんがため息をつく

ん、急を要する事件つて……あれか？

「その事件つて……あのレベルを上げるってやつ？」

「よくご存知なのですね」

「学校で噂になってる」

なんでも使っただけでレベルが1〜2も上がるお買い得製品だとか……  
確か名前は……

「レベルアップ幻想御手だつたか？」

そこから幻想御手について色々な話しをされた

なんでも幻想御手は実在するが使えば昏睡状態になるとか……  
レベルが上がった能力者が様々な事件を起こしているとか……

「ん？じゃあさっきの二人組つて」

「恐らくは幻想御手を使った輩なのかと」

それならば納得できる。

多分幻想御手を使い、レベルが上がった事で優越感に浸っていたのだらう

「じゃあここにいる風紀委員が白井さん一人なのって」

「皆幻想御手の情報をつかむ為に留守ですので、そういうわたくしもたまたま近くにいたので駆けつけただけです」

つまり幻想御手はいけないお薬って訳か、そしてそれを駆逐する為に風紀委員が血眼になってるといふ事が

「ふう、もし幻想御手についての情報を得たのであればここにきて下さいな。あと、今日の事件に関しては明日も事情聴取させてもらいますので朝方においで下さい」

「りょくかい」

明日は休日、特にやる事もなし

じゃ、明日までに幻想御手の情報集めますか

てなわけで一日たってやって来ました何処ぞの廃墟

ほんとは昨日のうちに探偵ごっこしたかったんだけど時間が時間で眠かったからやめた

あ、でもちゃんとゲームはしたぜモン

その後金　ロードショーでやってたホラー映画みてまたゲームして……あれ？睡眠時間三時間？

今頃気付いた新事実には若干鬱になりながらも目の前の廃墟に入る  
それでも適当に歩いていたら幻想御手の取引現場に着いちまうなんてほんと『奇跡的』だよな

「で、こういう廃墟には柄の悪いお兄ちゃん達が沢山いるわけだ」

数は四人、そして何処かの女子中学生が一人、幻想御手を買いに来たのかな？若干怯えてるけど

「貴方達なんか、すぐに警備員が来て拘束されるんだから!!」

「あんだとてめえ!!」

警備員をよんだか、まあでも常識的に考えて間に合わないよな……  
警備員がくる前に君が捕まって監禁されて犯されるのが関の山だ  
まあそんな事目の前でされたら寝覚めが悪くなるから一様助けるんだけどな

てか全く関係ないけどここタバコくせ、さっさと終わらして聴取受けに行くか

「あゝあゝ、中学生を四人がかりで挑発すんのはどうよ？かっこ悪



いと思わないかい？」

「あ？誰だてめえ」

「あなたは！？」

ガン飛ばして来た方の奴、あれがリーダー格か？

「警備員にはその子が連絡したんでしょ？俺が到着するまでの時間稼ぐから」

「で、でも」

「おい見てみるよ、こいつ落森の制服着てつぞ」

「ぎゃはは！あの落ちこぼれどもの一人かよ、カッコつけてると痛い目にあうぜガキ」

オロオロしていた中学生を背中であお形で守る  
この自信からこいつら全員能力者、多分実戦に使える段階まではいっているんだろう

「んじゃガキ、邪魔だから燃えとけ」

男の一人が手に炎を宿す……昨日に続いて今日も発火能力者かよ……  
レベルは3ぐらいか？

「燃え尽きな！！」

手に宿った火の玉をこちらに投げつけてくる

はつきり言つてそれぐらいの火力では人一人殺す事も出来ないぞ……  
まあ念には念をいれて

「ギヤアアアアア！！」

「え？」

「なっ？」

火の玉は《突然の突風によって引き返し、自分の顔面に直撃した》

「おお、『奇跡的に』突風が吹いて助かったか」

「てめえ」

「おいおい、なんで俺のせいなんだよ。恨むなら風を恨めよ」

「「殺す！！」」

残った三人の内二人が襲いかかってくる、どちらも手には金属バツト………能力使わないんだ………

「はあ、金属バツト程度なら素手で「ガツ！ガツ！ガツ！」………  
………」

俺が前に出ようと踏み込んだ時唐突に男二人は壁に『縫い付けられる』………新手か？

「ジャッジメント風紀委員ですの！！貴方達を拘束いたしますわ！！」

「あ、白井さん」

「あら、昨日の殿方ではありませんか、色々と聞きたい事はありますので後で177支部に来て下さいな」

連絡を受けてきた警備員つて白井さんか？

まあ白井さんはレベル4、後は任せて大丈夫だろう

「あ、あの」

「ん、ああ、怪我とかなかった？」

「はい、おかげさまで」

「いやいや、今日は運が良かっただけで俺は何にもしてないから  
実質俺はこの子を庇う様に立っていたただけだ、礼を言われる事など  
していない」

「じゃ、さっさとここを出ようk」「ズドンッ!!」「……あらあら」

視線を音がした方へと向けて見ると……白井さんが盛大に蹴られた  
な……女の子を蹴るとか……

満身創痍の白井さんの周りには白い鉄針が何本も落ちている。

金属バット二人を固定したのと同じタイプだ

あれを空間移動させて戦うのが白井さんのスタイルなのだろう

「くっ!!」

白井さんが最後の一本を空間移動させる、相手の能力は分からない

けど手助けするなら要するに《あれを当てればいいんだろ?》

ガスッ

「ガッ!?!」

「(当たった!?!) 今なら!?!」

鉄針が当たり動きが鈍くなった男への打撃、例えるならば空中コンボだろうか?

その腕が、足が男に吸い込まれる様に叩きこまれる

「これで」

「うっ」

「終わりですわ!?!」

柔道の投げ技を喰らった男はうめき声をあげ、呟く

「何故だ……俺の演算に……狂いは、なかった筈」

「お前が何の能力者かは知らないけどさ」

そう、恐らく男がした演算に狂いはなかったのだろっ、けどどな……

……

「『奇跡的に』調子が悪かった、ただそれだけの事だよ」

その後、男は意識を落とした

### 第三話

#### 奇跡を創作せし者（前書き）

スタイルとの戦闘です。

短編で書いた戦闘とはまた違う物になっています。

短編通りでいくとかなりのチートキャラになってしまいましたすしね。

誤字脱字、教えてくれると幸いです。

### 第三話 奇跡を創作せし者

「貴方は事件に巻き込まれやすい不幸体質でもお持ちですか？」

「そんな体質持った気はないんですけどね、まあ学園都市に一人ぐらいはいるんじゃないですか？そういうやつ」

前回と同様、風紀委員の……第なん支部だったかな？

まあ連れてこられて昨日と同じソファーに座っている……今日出された紅茶は昨日と同じのだったが何故か『半額！』というロゴが見えてしまった……ちなみに午の紅茶のミルクティー

「それと貴方、本当に無能力者なんですか？昨日はレベル4とレベル3を、今日は同じくレベル3を、これだけの能力者を相手にしてレベル0が無傷なのはいささかあり得ないと思うのですが」

「運がよかったとしか言いようがないな」

さっきの交戦の後、リーダー格の奴から情報を提供？してもらったので頭に花を咲かせている中学生が何やらパソコンを使いカチャカチャと何かを探している。

うっん、頭から花って咲く物なんだな、今度やってみよ

「あ、あの」

花の子の事を見ていたらさっきの女の子が声をかけてきた。確か名前前は……佐天さんだったか？

白井さん達の友達だと聞いたときは驚いた

「さつきは助けて頂いて、ありがとうございました」

「気にしないでいいよ、俺は何もしてないしね、お礼を言うなら白井さんに、あと、もう帰ってもいいですか？」

「聞きたいことは聞き終わりましたので帰って貰って結構ですわ、それでは」

「ん、幻想御手の件、頑張ってたね」

外はもう真っ暗だ……コンビニで弁当買って早く帰ろう

「ん、ねみい……昨日ホラー映画なんて見るんじゃなかったな  
……苦手な癖に」

昨日は眠たかった癖に金ロードショーでやっていたホラー映画を見て、さらにモンソンをしていたせいでろくに眠れていないのだ。日付けが変わるまでに布団に入る俺にとってはきつい  
しかも昨日、今日と風紀委員で一日中尋問させられたのだ、体はもうグツダグダだ



「あゝ、でも今日は久しぶりに世にも奇 な物語するんだっ たっけ？ 見たいなゝ、でも俺あれも苦手なんだよなゝ、だけどなゝ」

眠たい日程好きな番組が夜にするんだ、どうにか出来ないのかなゝ、録画するか？ でもやっぱり生で見たいよなゝ

家の近くまで来たらふと今日の晩飯を買っていないことに気がつく、忘れなくてよかったぜ、家帰ってからまた外出るとかめんどくさい

パパパパパ〜ン、パパパパパン

近くにあったファ リーマートで適当な弁当をカゴに入れる、ちなみにどんなのかというと……

『黒毛和牛の焼き肉弁当』（2000円）

なんでこんなのがコンビニにあるんだろうな、どっちにしる買っけど…

「んじゃ、次は飲みもn「ガチャンガチャンガチャンガチャン」………」

こついうのをマニアというんだろうか、同じ銘柄のコーヒーをやけ買っている白髪はくしの青年、白髪まゆげとは言っちゃ駄目だぞ

余談だが買ってるコーヒ―は全てuccだったりする

「あん………」

「い、くんばんわ」

目つきが無茶苦茶悪い目の前の青年はこっちの目線に気がつくとい

きなりガンを飛ばしてくる、てか………怖っ！！今日と昨日の不良とは違うよ！！本格的な殺意じゃねーか！？

内心ヒヤヒヤしながらもファ タを取り出しレジで、会計し、そのまま外へ出る、中を覗いて見たらまだガチャンガチャンしてるよ………いわゆる変人なのか？

それから五分程歩いた後、自分の住んでいるアパートを見つけ、速攻現実逃避を開始する。だって………

「なんで萌え、いや、燃えてんだよ」

俺はアパートに住んでんだけど………燃えてるんだぜ、家が………  
一様まだ自分が住んでる下の階だけなんだけどこのまま放っておいたら………全焼するな………てか、もう手遅れじゃね？

「その前に中の奴らは気づいてんのか？」

内装は無視しても一様学園都市製の寮だ、中にいる奴らが気付いているとは限らない、てかなんで廊下から出火してんだ？誰かが火遊びでもしたのか？

「全くもう、まずはこの階に住んでる奴の非難だなっ」と

アンチスキル  
警備隊に連絡した後、急いで寮の階段を登る

今の俺にできる事はこの寮に住んでいる奴らを一人でも多く逃がす事だ

俺が持つ『能力』で消す事は出来ると思うがこれだけの炎を直ぐに消すとなればそれは昨日今日まで使ってきた『奇跡』と誤魔化して

使用してきた『偶然』では無く、本当の『奇跡』を起こさないといけない  
だがそれをするならば演算する時間がどうしても必要となる……  
その間に一人でも死んでしまったら元も子もない

「火事の出火は……この階からか!」

階段を駆け上がった場所にいたのは……

頭がツンツンとウニみたいな学生と

赤い髪に黒い神父服、目の下にバーコードという厨二全開な格好をしたエセ神父

更に極めつけは、RPGで出てきそうな炎の怪物

学生<sup>ウニ</sup>の後ろでは血まみれ幼女が虚ろな目で「魔術による」や、「ルーン文字によつて」とかどうたらこうたら何かのゲームの攻略法的な事をひたすら喋っているが君は自分の心配をした方がいいと思う。血を流しながら攻略法説明するってどんだけゲーム好きなんだよと、さつきとはうつつで違つて冷静になりながらも目の前の二人を観察する

炎の怪物はどうやらエセ神父が操っているらしい、エセ神父が怪物に指示を飛ばすと怪物はウニ君に向かつてその手に持つ十字の武器を振りかぶる

はつきり言おう、ウニ君は詰んだ……

(演算完了、これでウニ君が『奇跡的にすべての攻撃をかわす』)

元からかわせない攻撃ではないが攻撃範囲が問題だ、あの十字をかわせてもまだ片腕が残っている

だからあえて『全て』にこだわった、なにがあつてこんな喧嘩になつているのかは知らないがあの怪物は間違いなくレベル5相当の攻

撃力はあるはずだ、普通の学生に向けていい物じゃない  
だからウニ君が逃げた後俺が時間稼ぎを………つな!?

ウニ君は俺の予想とは裏腹にあの十字を『受け止めた』、普通はドロドロに溶けて原型を残さず死んでいる所だがウニ黒いはその攻撃をしつかりと受け止め、その場に立っている

だが俺が驚いたのは、また別の事だ

(能力が………『打ち消された』だと………)

俺は間違いなく少年に向けて能力を行使した、だが行使した『奇跡』は綺麗さっぱり、跡形もなく『打ち消された』  
こんなこと、初めてだ

ぼんやりと少年を眺めていると怪物の攻撃を振り払った少年がこっちに逃げてくる。あ、見つかった

「なっ!?!お前なにしてんだよ!!俺が時間を稼ぐから早く逃げろ  
!?!」

俺を、守る様に背を向けて怪物の前に立ちふさがるウニ君、対するエセ神父は俺の顔を見ると苦い顔をした後、こっちに怪物を向かわせる

「いつから部外者が………くっ、無駄な殺しはしたくなかったが………  
…仕方がない、インケンティウス魔女狩りの王!!!」

「殺す」の一言で意識が覚醒する、馬鹿だな俺、能力が打ち消されたとかは今解決しないといけない問題じゃないだろ。

今はこの状況を打破する事が重要だろ

「なにしてんだお前！！早く逃げ」あの怪物を倒す手段、知ってるか「っな!？」

俺に背を向けていたウニ君が顔だけこちらを向く

「くっ、この寮の中にルーンってやつがあってそれを全部ぶっ壊せばこいつは倒せる」

「なるほど……」

・つまりこいつはルーンっていう「物」の力によって作られてるのか……なるほど、

案外簡単じゃねーか

「十秒だ」

「えっ？」

「十秒時間を稼げ！！その間に俺の力でこいつを倒す!!」

「……………信じて、いいんだな」

「当たり前だ」

「往生際が悪いな!!」

エセ神父が十字の炎を投げられ、さらには怪物も迫って来るがウニ君はその中に向かって走り出す

そして俺は、目を閉じ、集中し、演算を開始する……

目の前の怪物はレベル5相当、さっき投げられた十字の炎もレベル4相当、仮に相手を能力者だと断定するとレベル5のその演算能力に狂いは一切生じない

昨日今日に相手をした能力者は「演算を必ずしも成功するとは限らない」のだ

なので俺は「奇跡」という名の「偶然」を「創作」し、結果的に自滅した

だがレベル5にもなるとそうはいかない……

彼らは演算を「絶対に」間違えない

だからこそ彼らが演算を間違えるという事は本物の「奇跡」となる

……

だからこそ目の前のこいつに「偶然」は通用しない、目の前の怪物は「完璧」な演算によって成り立っている

こいつは絶対、その演算を間違える事は無い

だからこそ、俺は……

「ぐっ、うあああああ!!」

その圧倒的な火力によって青年は吹き飛ばされる、後ろにはその場に立ったまま微動だにしない少年

「全く、ルーンを全て破壊しないと魔女狩りの王は倒す事が出来ないと教わったばかりじゃないか、馬鹿の一つ覚えで魔女狩りの王を倒せるとでも？それともなんだい、後ろの少年を本気で信じているのかい」

鼻で笑うように神父は青年に話しかける、だが青年は立ち上がる、だつて彼は……

「あいつの目に迷いはなかった、信じていって言ったんだ、それに答えてやるのが」

青年は自分の右手を構える、目の前の怪物を迎え撃つ為に、後ろの少年を守るために

「『仲間』つてもんじゃねーのか!!」

フラフラになりながらも青年、かみじょう「上条 としま当麻」は怪物を向かって突進し、右手をぶつける、そんな中彼には確かに聞こえた、後ろで発せられた小さな声を……

「演算、完了だ」

その瞬間、炎の怪物は『消し飛んだ』

「なにが……………」

エセ神父が目を見開く、例えるならば『困惑』だろうか？

ああそくだよな、お前みたいな優秀な奴にミスなんて『あり得ない』よな

「ルーンっていうのがなんなのかは知らないが…………そのルーンに異常があったという『奇跡』を『創作』させてもらった」

「なっ、ふざけるな！！ルーンに異常だと！？そんな事は『あり得ない』！！魔女狩りの王、イノケンティウスイノケンティウスウウウウ！！」

張り裂けんとばかりにエセ神父は叫ぶが、そんな物は徒勞でしかない

「くっ、灰は灰に」

エセ神父が新たな技を発動させようとするがそれより先にウニ君がエセ神父に向かって走り出す

好い加減諦めろ、この勝負



「うおおおおおお！！」

俺達の勝ちだ

そして次の瞬間、

ウニ君はエセ神父を渾身の右腕で盛大に殴りつけ

エセ神父は意識を手放した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1279ba/>

---

とある奇跡の超能力者

2012年1月6日20時53分発行